ザンスカールPK6000（Rucho）未踏峰登頂

古　畑　隆　明（日本登攀クラブ）

はじめに

2017年８月１日午前９時11分インドJ&K州ザンスカールにあり地元民がチャンダルと呼ぶ山域で名も無き6,000ｍのピークへ同じクラブに所属し私の先輩である山野井泰史氏と共にアルパインスタイルで到達。ほんのひと時の幸せに満たされた時間を味わうことができた。

経　緯

インド遠征の前年秋に山野井氏と私、他１名からなる３人でネパールヒマラヤにある6,000ｍほどの山に挑戦していた。この遠征はメンバーそれぞれに意味あるものだった。私と、もう一人にとっては人生初の海外、海外遠征であり、サラリーマンをしている私にとっては長期休暇取得申請もドキドキする出来事だった。なぜなら20年以上勤務して上司後輩を含め30日も休んでいる者を見たことがないからだ。家族と職場の理解を得て挑むことになったヒマラヤクライミングだが経験ない２人は飛行機チケットからエージェントとの段取り、スケジュールまで全てを先輩である山野井氏へ任すばかりだった。

後で知ったことだが、山野井氏もネパール遠征以前ヒマラヤクライミングを３回連続で失敗しておりこの遠征にかける思いも大きかった。が、結果は敗退…４度目のヒマラヤ敗退に「もうヒマラヤは無理かな…」と、もらしていた。しかし、無理と思わせてしまった原因は私達だったことに間違いなく単独登攀か違うパートナーだったら成功していたように思う。自分の力の無さに、無理と思わせたことに、心底悔しかった。

ネパールから帰国してしばらくすると、もう一度何かにチャレンジしたいと思っていた。色々計画を考えていても肝心なパートナーが決まらない。もちろん山野井氏へも声をかけたがはっきりとした返答はもらえていなかった…計画倒れがよぎり始めた頃、離島クライミングへ出かける直前の山野井氏より「インドは行ったことないし、ザンスカールあたりはどうか？」と連絡があった。留守の間、この山域について調べGoogle Earthを毎日眺めた。そこから選んだ候補の中にこの山が含まれた。戻った山野井氏と共に具体的計画をたてるため、パソコン画面に映し出されたデジタル画像をあらゆる角度から眺めUnnamed Peak PK6000が最有力候補となり、この山の北壁を登攀し、山頂左寄りのコルに達し尾根を上がり最後は傾斜のゆるい雪面を歩き山頂へ達するラインが美しく実行可能と判断した。しかし実際の山姿を確認しようと写真を探すも情報の少ないこの地域の写真を入手することはできずGoogle Earthの画像だけをもとに遠征計画をJ&K Unnamed Peak PK6000へ決定したのが2017年４月19日のことだった。

出発日を2017年７月17日とし、パートナーと比べ圧倒的経験不足の私は週２日の休みを山か岩登り、他３～４日仕事後６時半から10時半までジムでトレーニングをこなし、エージェントの確定や打ち合わせ、職場（有給休暇申請）と家庭の調整と忙しい３ヵ月を過ごした。

インド（ニューデリーからBCまで）

インド、インディラ・ガンディー国際空港までは当初、価格の安さから（約49,000円）中国国際航空を利用し成田から北京経由で入るつもりでチケットを購入していたが、後に知人から同航空会社でトランジット時の荷物紛失話しなど不安が募っていた矢先、先方の航空会社からフライト中止の連絡。喜んで？エアーインディへ変更（約85,000円）した。値段は大幅アップしてしまったが直行便という快適さを手に入れた。７月17日フライト時間約10時間でインディラ・ガンディー国際空港へ到着、空港内で携帯電話用プリペイドSimカードを購入し、うだる暑さの空港外へと出た。インドの携帯電話事情だが今回私が購入したSimカードは遠征先であるJ&Kでは利用することができない。J&Kで使用できる携帯入手は少し面倒なようだ。あくまでニューデリー滞在時の使用を目的として30日有効のカードを950ルピーで購入した。この購入も空港内だと必要な物はパスポートのみで、外に出るとなにかと大変なようである。また移動先のレー（Leh）ではWi-Fiを含めインターネット環境は悪く、カルギル（Kargil）で泊まった宿ではかなり遅い通信速度ではあったがWi-Fiを利用することができた。

エージェントと合流後、彼らが用意したエアコンが良くきいているバスに乗って２日間の宿ともなるIMF（Indian Mountaineering Foundation）へ向かった。到着してすぐに私のパスポートがないことに気が付いた…Simカード購入時に忘れてきたのだ。この後バタバタ大変だったのは書くまでもないことで、インド滞在時に山野井氏をはじめ皆から「パスポートは持っているか？」とからかわれることになった。

翌日18日にIMFにてブリーフィングを行ったが語学力の乏しい私の出る幕はなく山野井氏に全てをまかせるばかり…この日私達のLOであるSartaj氏と合流、面倒な人でなければ良いなと思っていたら、かなりの好青年だった。

翌日19日レー（Leh）へ向けて国内線（ゴーエアー）で移動する。私達の荷物は重量オーバーだったがLO（Sartaj氏）が職員を説得し追加料金はなしとなった。

レー（Leh標高3,500m）の飛行場で現地ローカルガイドと合流、ホテルへ移動する。安い旅館で構わないと注文していた割にまともなホテルで２人して驚いた。この日、現地ガイドとスケジュール確認をしていると、どうも話しがかみ合わない。私達はHagshu Nalaという谷に入ったところにある山だと言ってもDarugDrung氷河だと言っている、しかもかなり手前の村ラングダム（Rangdum）から歩くと言っているが、こちらで調べている限りもう少し車で入っておかないと歩く距離が長すぎる。不安が残ったまま翌日20日にLo（Sartaj氏）、ガイド，コック（Devendra氏）と私達の５人、レーから車で５時間ほど行った

町カルギル（Kargil標高2,800m）へと入った。ここまでの道は舗装された快適なドライブだった。翌21日はラングダム（Rangdum標高4,000m）へ移動した。道は途中から悪路となり５時間ほど要した。ここで改めて私達が目指すBCの場所についてLO（Sartaj氏)、ガイド、この村の住人で我々のキッチンヘルパー（Dorje氏）と共に話しをする。ここに来てやっと現地付近を知っている者と話しをすることができ行くべき場所がはっきりとしてきた。

がしかし、今度は金銭的な問題が発生、車は今いるラングダム（Rangdum）までの料金しか支払っていないという。目的地近くの村まで行くには追加で6,000ルピー必要だから支払ってくれという。日本からメールでエージェントとやり取りをしている際には現地地図を送ってありIMFでの打合せでもエージェントオーナーは私達が目指す山の場所を理解しているようだったがローカルガイドに正しく伝わっておらず彼らは目的地よりはるか手前にあるDarugDrung氷河に行く計画だったようだ。これから先いくら追加になるのか不安になりながら翌22日悪路を進み３時間ほどでアクショーの村（Akshow）へと入った。この晩、想定通りガイドから、BCまでのロバ代、帰りのロバ代、車代不足分が必要になると言われるが、その額が高い…既に追加で車代を払っているのだから、さすがにそれは困ると、村にある衛星電話でエージェントと直接話しをすることにした。込み入った話しでLO（Sartaj氏）が代表して話しをした。彼は半々でどうだ？と言っていたがはっきりとした結論は出ず、遠征が終わったらまた話そうということになり電話を切った。

翌23日アクショーの村（Akshow）から馬、ロバ10頭と共にHagshu氷河を横に見ながら４時間ほど歩いたところに快適なBC適地を見つけ出しテントを設営した（標高4,150m付近)。地図にはこの谷をハグシュ（Hagushu）と記載されているが現地の人々はアクショー（Akshow）と呼んでいて私達の目指す山がある一体をチャンダル山域（Chandel）と呼んでいた。地元民はこの谷を行き来していることから現地へスムーズに入れなかったのは呼び名が異なるためだったように思われる。

順化・偵察・アタック

緑あふれるBCからは私達の目指すべき山が見える。だがそれはGoogle Earthでみた形とは大きく異なる。北壁から上がって山頂左寄りのコルは想定以上に切れ込んでいて双耳峰のようになっており、傾斜のない雪に包まれた山頂部は鋭く尖った岩の形状をしていた。目指すべき山以外に周囲の山々と持って行ったGoogle Earthの画像プリントを照らし合わせると、なんとなく同じではあるが、頂上付近は丸みを帯びてしまうことが多いようだ。冷静に考えれば異なるのは当たり前かもしれないが・・・情報の少ない山

域で写真を見たわけでもないのだから想定外はあたりまえだろう。逆に想定より鋭い山容には不安と共に少し嬉しさも感じていた。

24日、順化も含め4,700m付近まで丘をあがり偵察。北壁を検討していたが思った以上に雪が少ないため東壁を挑戦することに決定。翌25日はBCにて休養。山野井氏とギアの打ち合わせから食糧の打ち合わせ、登攀ラインについて何度も話しあう。26日は朝からBCを出発し～28日まで氷河がはじまる5,000m（ABC予定地）でテントを設置し登攀予定の東壁を偵察。気温が高い日が多くあちこちから落石が頻発していて24日に確認したときより雪が解けているようだった。双眼鏡で登攀ラインをお互い確認しあうが最後の200mほどが見ることができず確認することができない。28日、下降路の偵察のため南稜を5,500mまであがる。お互い順化はうまくいっているように感じる。29日、30日をレストとして31日にABC（5,000m）へ移動、８月１日にアタックと決めた。28日の晩はこちらに来てから初めてのまとまった雨だった。雪ではなく雨だったことから雪解けが進むことが気になった。29日は山野井氏と最終的な登攀ラインについて打ち合わせ食糧の最終調整を行う。レストの２日間、昨年もそうだが、アタック前のプレッシャーがきつい。山野井氏から「もうここまで来たのだから、あとは楽しもう」と言われ少し落ち着く。登攀後に聞いたのだが山野井氏も毎回アタック前には私と同じようなものだと話していた。過去何十回も同じように…プレッシャーと戦っているのだと。

31日（晴れ）、朝ABCへ向けて出発し昼頃に5,000mのABCへテントを設置し装備の最終確認。ここまで同行してくれたLO（Sartaj氏）へ最終的な計画を説明し彼と別れた後、午後５時には寝袋へもぐりこんだ。偵察に来た日よりも更に雪が融けていて予備日はあれども今回のチャンスを逃すと次回はないな・・・という感じだった。

８月１日（晴れ）、午前１時半東壁へ向けて移動を開始、落ち着いているし体調も良い。山野井氏もいつもと同じように見える。午前２時を少し過ぎたころには東壁の登攀を開始。少しばかり期待していた月明りはまったくなくヘッドライトの明かりではルートが確認できないため時折ライトを消して目を閉じて暗闇に目を慣らしてはルートを確認していた。そうして確認したルートを時間短縮のためにロープを結ばず登り続ける。東壁は最大傾斜70度ほどの氷雪で形成されていた。

稜線を抜けたのは午前５時半まずまずのペースだ。お互い稜線で親指サイズのチョコレートをひとつ口に入れ、テントや不要な食材などをその場に残して荷物を軽くし頂上を目指す。しばらく60度ほどの雪面を上がり、不安定な雪面のトラバース部からロープを結びあい２ピッチで、雪面のトラバースを終えて、３ピッチ目（ボトルネック状から薄氷を抜ける）このピッチのすぐ隣は絶え間なく落石が発生していてバウンドしてこちら側に飛んでこないことを祈るばかり。リードしている山野井氏は氷の状態も悪く岩は脆いためまともな支点が取れないうえに、すぐ隣の落石で気持ちが悪いクライミングとなったようだ。

４ピッチ目（氷雪）ここも支点に良いものは取れない状態が続き、下降が不安になる…５ピッチ目（氷雪）太陽も上がってきて雪の状態が悪くなり登りにくくなってくるが、上部でビレイする山野井氏の顔に少し笑みがこぼれている。ビレイをしているその場所から少し回り込み20mほど上がったところが山頂だったからだ。６ピッチ目（脆い岩場）ボロボロの岩場を上がった。ここまでの約300mは落石の危険と脆い岩、氷と、気が抜けない登攀が続いたが、その先には2人がぎりぎり座れるだけの山頂が待ってい

た。山野井氏が先に上がるまでの60秒弱を動画に収めた後、私も山頂へ向かった。体の状態は良くとも、昨年の失敗のイメージ、そして今回もまた失敗したら・・・自分が原因でまた敗退したら…という不安が付きまとっていたこの遠征、目の前に山頂がある。山頂へ向けての一歩一歩が嬉しい。先に山頂にいる山野井氏も喜んでいる。ヒマラヤ遠征で４回の失敗からの今回の成功、そのことを素直に喜んでいるようだ。山頂（6,000m）へ到着したのは午前９時11分だった。本当に嬉しかった。山頂から見えた素晴らしい山々をほんのひと時２人で楽しんだ。最高の幸せだ。

しかし、最高の瞬間を楽しんだ後は今登ってきたルートを下降しなくてはいけない。岩のラインはクライムダウンをし、その後懸垂下降すること６回、登ってきたときよりも落石が激しさを増し脆い岩の中、山野井氏が懸垂支点をＶ字スレッドやいくつかのギアを残置しながら作成し下降した。このような状況下で山野井氏の下降支点作成の正確さにはいつも感心させられる。デポした荷物を回収し少し休憩した後、南稜5,500m地点へ移動このままABCまで下降することとした。易しい雪面も体の疲れと、日差しで雪質が悪くなっていて歩きにくい。午後４時30分 LO（Sartaj氏）の待つABCへ到着、安全地帯へ降り立ったことで改めて初登頂した喜びを噛み締めた。トータル15時間の登攀となった。

スピード感あるアルパインクライミングを楽しむことができたと思う。翌日BCへ戻り数日後、我々はこの山名についてどうしようかと考えた。BCから見るその山姿は角のようで地元民と相談した結果、現地の言葉で角を表すRucho（ルーチョ）と名付けた。

【登攀概要】

India Zanskar RUCHO 6,000m初登
東壁　標高差1,000m グレード TD
2017年８月１日（ABC往復15時間）
メンバー：山野井泰史（52）
　　　　　古畑　隆明（43）

【日程】

7/17 成田〜インド
7/19 レーへフライト
7/20 レー〜カルギルへ車移動
7/21 カルギル〜ラングダム
7/22 ラングダム〜アクショー
7/23〜7/30 BC偵察休養
7/31 ABC（5,000m）入り
8/1 午前１時半登攀開始
　　午前５時半稜線を抜ける。
　　午前９時11分登頂
　　午後４時半ABCへ戻る。
8/2 BCへ戻る。
8/3〜8/9 BC
8/10〜8/11 アクショー
8/12 アクショー〜カルギル
8/13 カルギル〜レー
8/14 レー〜ニューデリー
8/15〜8/16 インド〜成田

【登攀時装備】

ロープ７×60	１本	カム	６個
ナッツ　1セット	1	ハーケン	７枚
アイススクリュー	２本	スノーバー	１本
捨て縄		スリング	数本
カラビナ	数枚	確保器	各自
テント	1	シュラフ	各自
コンロセット	1	ガス	1
水筒	各１	食糧　※1	

※1　食料（モンベルリゾット100g/１個・マッシュポテト35g/１個・他行動食少々）etc

予定がスムーズに進んだことで８月９日までBCに滞在その間LO（Sartaj氏）と３人でボルダリングをして遊んだりとゆったりとした日々を過ごした。10日アクショーの村へ降りて８月14日にニューデリーへ戻りインド、インディペンデンスデイである８月15日夜発の飛行機で日本に向け出国８月16日に帰国した。心配していたロバ代、車代などの追加料金に関しては成功報告の後、請求されることなくエージェントが負担することで決着した。現地の天候は滞在期間中、まとまった雨に降られたのが１度だけあったが、他は夜間に少し雨がぱらつく程度で天候は安定していた。しかし、日中の気温は高かったため標高6,000m前後の山では雪解けが進み、あちらこちらで落石が起きていた。我々より少し早い時期か、寒くなる秋でもよいのかもしれない。

さいごに

日本に帰国してから今回の遠征について振り返っても山頂へ到達した時の嬉しさを思い出す。昨年秋の悔しい思いがあるから尚更嬉しいのだろう。山野井氏が帰国後、とあるブログへ「今回のルーチョ、もう少し難しく美しいラインから攻められたのではと言う気持ちも少し残りましたが、スピード感あるアルパインスタイルで頂に到達できたことを素直に喜びたいと思います。山頂に腰かけた瞬間は、ここ数年では最高の幸せを味わえたからです。」と、ラインに選択余地はあったものの、ここ数年では最高の喜びと記載した山野井氏からも嬉しさを感じとることができ、私としても2016年秋、敗退した遠征に一区切りつけることができる遠征となった。

今回の遠征にあたり、インドについての情報を持ち合わせていない我々にザンスカール地方の情報提供していただいた阪本公一氏、インド情勢など情報提供いただいた寺沢玲子氏、他ご協力いただいた皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

日本登攀クラブ　山野井泰史・古畑隆明